

引退した
嫌われ

S級冒険者は スローライフに浸りたいのに！

気が付いたら辺境が世界最強の村になっていました

Bitansan
微炭酸
III. 紅木春



Intai shita kiraware "S"kyuu boukensya ha
SLOW LIFE ni hitaritainoni !

・登場人物紹介・

セイラ

神官の女性。いつも穏やかでロアたちには優しいが、ドドリーにだけ当たりが強い。

リュグ爺

謎のおじいちゃん。物忘れが激しく、一見するとただの老人に見えるが実は……

ドドリー

エルフ族の男性。とにかく筋肉を鍛えるのが好きで、ロアをよくトレーニングに誘う。

ユズリア

歴史のある名家で生まれた貴族令嬢。辺境で出会ったロアに婚約を迫る。

サナ

ロアの妹で一流の魔法学校に通っている。ロアに近づく女性には強い嫌悪感を抱く。

コノハ

月狐族の少女。自分が住んでいた村を追い出され、ロアのいる辺境へとやってきた。

ロア

本編の主人公。自由な生活を夢見ている。困っている人は見過ごせないお人好し。

プロローグ

「今日で冒険者引退します！」

ギルド長室に入り開口一番、俺——ロアはここ数年で一番の笑顔と共に告げた。
依頼争奪戦が繰り広げられる朝の喧騒が、部屋に響く俺の陽気な宣言を瞬く間に消す。

ただ、俺の目の前でその宣言を聞いていたギルド長は口を半開きにして言葉を失ったままだ。返答を待ってもよかったが、俺にはこれ以上話すようなことは残っていなかった。

引退といっても、S級冒険者は数年に一度の等級更新が必要ないため、永遠に等級が降格しない。つまり、ギルドカードを返却しない限り、どんなに力が衰えようともS級の称号は残ったままだ。ある人は過去の栄光を携えるため、また、ある人は税金の免除などの特権のため。俺だって引退なんて宣言せずに、ふらっとこの街を出てしまえばよかったのだ。

それなのにわざわざ「引退」と明言したのは、十年という長い時間身を置いていた場所への別れのため。ギルド長に引退を伝えたのはあくまで自分の中でけじめをつけることのついでに過ぎない。ずんぐりと太った河馬のようなギルド長が、慌てて椅子を引いて立ち上がった。

「ま、待ってくれ、『釘づけ』！」

その変な呼び方、結局好きにはなれなかったな。

ギルド長が額の汗をせわしなく手巾で拭いながら、間拔けな足音を携えて迫ってくる。まるでダンス中によろけた子豚みたいだ。河馬なのか、豚なのか、はっきりしてほしい。

俺はそつと二本指を縦に小さく振り下ろす。その瞬間、ギルド長の右足が棒のようになって不自然に止まり、勢いを殺せず前めりで倒れ込んだ。

「待って、と言われましても、これ以上話すことはないのですが」

上がった口角が元に戻らなくて困る。それはもう、待ちに待った日だから致し方ない。

床に這いつくばったギルド長が、半ば涙目で俺を見上げた。人が違えば褒美になるんだだけであ、俺は鳥肌の立つ腕を擦る。

「り、理由はなんだ？ 金か？ もっと仕事が欲しいのか？」

もっと欲しいも何も、これまでだって過重に依頼を押し付けられていたと思うんだけど。

「お金がいらなくなつたから引退するんですよ。捜されるのも手間でしょうから、こうして伝えに來ただけです」

見た目がちよつとうさん臭く見えるだけで、別にギルド長に対して変な禍根はない。せいぜい、依頼の報酬を何度もピンハネされた程度だ。ギルド長が小心者ゆえに、そう毎回されたわけではな

いのだから、目をつむれば済む話だった。

むしろ、そんな些細なことや周囲の冒険者からの陰口や嫌がらせさえ耐えれば、平民の俺でも父親の残した莫大な借金と、妹の魔法学校の学費を支払えるだけの金を稼げる職場だったのだ。感謝しかない。

「今度はもしかしたら依頼する側でくるかもしれないので、その時はサービスしてください。それじゃ！」

俺はこの期に及んで引き留めようとするギルド長を尻目に、ギルドを出た。

背後から「腐ったスーパの捨て先がなくなつたぜ」と言う他の冒険者たちの声が聞こえ、同時に足元へスーパの入った器が転がる。中身が盛大に地面にぶちまけられ、俺の靴と服の裾を濡らす。じわつと、陰鬱な感情が込み上げた。それにわずかな憤り。その感情をなるべく小さく凝縮して胸の奥底にしまい込む。そして、胸に手を置き、魔法を発動した。

瞬間、まるで嘘だったかのように気持ち晴れやかになる。もう、後ろ指をさされることを気にする自分はいなくなっていた。

俺は往來の激しい大通りをスキップで駆ける。初めて吹いた鼻歌もどこか陽気に聞こえた。今なら空も飛べそうな気分だ。

今日という日を十年待ち望んでいた。これで俺は晴れて自由の身。組織の圧にも、借金取りにも

縛られない素晴らしい日常が始まったのだ。

昼から酒盛りでもしたい気分だが、街に居残っていたらギルドの面々が血眼ちまなこになって追ってくるに決まっている。捜すなど言って、本当に捜しに来ないとは思っていない。だから、気分が乗っているうちにさっさと街を出てしまおう。

この国にいるS級冒険者は俺を除いて一人だけ。それはもう、依頼人たちからの需要が高いのだ。

「——ロア先輩！」

旅立ちに必要なものを買い揃えていると、突然、俺の名前を呼ぶ声が後方から聞こえた。

振り向くと、見覚えのある顔があった。自分の背より高い杖スタッフを両手で抱え、可愛いらしく結った栗毛の長い髪を背まで垂らした小柄な少女。そのくりつとした紅茶色の瞳が俺をまっすぐに捉とらえていた。

「お？ ユーニャじゃん。どうした？」

走ってきたのか、乱れる呼吸を落ち着かせる暇もなく、ユーニャが上目遣いで見つめてくる。

「ロア先輩、冒険者辞めちゃうって本当ですか!？」

「そうだよ。この後、ユーニャに直接伝えに行こうと思ってたけど、実は旅に出ようと思ってね」
「どうして、突然……」

「突然じゃないよ。前から決めてたことさ」

ユーニャは重たげな息と共に肩を落とす。

「そ、それじゃあ、私も連れて行ってください……その、旅つてやつに」

ユーニャの言葉に、俺はゆっくりと首を横に振った。

「ユーニャはS級になつて、親父さんに楽させてあげるんだろ？」

「そ、そうですけれど……」

「そんなに一緒に行きたいって言うのなら、俺が依頼をこなして、ユーニャの親父さんが困らないだけの金を用意してやろうか？」

我ながら、なんて意地悪な断り方なんだろうか。

でも、俺が街から出ていくせいで、才能溢れるA級の冒険者までこの街から居なくなってしまうたら大変だ。

それに、俺について回るとユーニャの評判を落とすことになりかねない。なんせ、俺は巷ちまたでは、S級に似つかわしくない冒険者として有名だからだ。

多くの冒険者曰く、実力が伴っていない、らしい。実際、俺もそう思う。

冒険者だった父親の悪名のせいで、最初から嫌われ者だった身としては、今さらその程度の厭いや味みつたらしい噂うわさはなんとも思わないけれど。

しかし、そんな評判が最悪な俺にこれまで親身にしてくれたユーニヤが、行く先々で俺と同じような扱いをされるのは到底受け入れられない。父親の悪名は他国にも知れ渡っている。きつとどこへ行こうと、俺は嫌われ者のままだ。

「……私がS級になったら、会いに行ってもいいですか？」

さんざん説得した結果、ユーニヤは諦めてくれたようだ。憐憫の情に駆られるが、俺が行こうとしている場所はユーニヤの実力ではまだ厳しい環境だろう。だから、これで正解のはずだ。

「もちろん。それに今生の別れってわけじゃない。たまには帰ってくるさ」

とはいえ、本当にS級になって会いに来られたらどうしようか。一人でまったりスローライフの予定が、突然年下の異性と二人きりの生活になったら……

まあ、当分は大丈夫か。A級とS級の壁は分厚い。そう簡単になれるものじゃない。だからこそ、S級冒険者は世界に百人としないのだ。

いや、ユーニヤにS級になってほしくないわけじゃないんだけどね！

悲しむ気持ちを悟られないようにユーニヤと別れた俺は、その後、魔法学校の卒業を控えた妹に手紙を送った。流石に唯一の肉親だけには行き先は伝えておこう。じゃないと、後が怖いし。

冒険者になるためにこのパンプフォール国にやってきて十年。俺は稼いだ金のほとんどを借金の返済と妹の学費に充てて、質素儉約の日々を送ってきた。

冒険者として色んなところへ行っただけで、新天地を求めて旅に出るのは初めてだ。

そこでふと、頬を伝う冷たい何かに気が付いた。

——ああ、ようやく……

少しの不安と大きな胸の高鳴りと共に、俺は最初の一步を踏み出した。



第一章 一人スローライフの始まりだ!?

旅といっても、行き先は決まっている。道中はしばらく馬車を乗り継いで、ひたすら尻の痛みに耐えるだけのものだ。

乗り合い馬車で色んな人と出会い、たまに魔物が出ると護衛の冒険者に手を貸して旅をするうち、一か月が経った。

「もう、馬車は嫌だ……」

俺は早くも心が折れていた。どんな高難度の依頼よりもキツイ。とにかく暇だし、馬車に乗りっぱなしだったことによる疲れで身体中が凝り固まって悲鳴を上げ続けている。

のんびり旅はいい。そう思っていた時期が、俺にもありました。合間に立ち寄った街や村で降りようかと何度も考えた。しかし、俺には休憩なしに馬車に乗り続けなければならない理由がある。

金がないのだ。

借金と学費の完済に浮かれて、旅費のことなど全く考えていなかった。引退といってもギルド

カードは返納していないから、入国税などはS級冒険者の特権で免除になる。それでもわざわざ途中で降りて宿を取るような余裕はない。一旦、依頼を受けて路銀の足しにしようとも考えたが、高らかに引退を宣言してきた手前、恥ずかしくてできなかった。それに依頼を受ければ足も付く。追われているであろう身としては避けたいところだ。

今さらになって自分の計画性のなさにうんざりする。

旅は行き当たりばったりなのがいいんじゃない——という意見には、全く以て同意だけれど、金が必要ならばそうもいかないのだ。

「お兄さん、どちらに向かうんですかい？ 次の村で終着ですけれど」

御者の男性が軽く振り返って尋ねる。

随分と遠いところまで来たせいかな、乗客は減り、馬車にはずっと眠る謎の老人と俺、そして御者しか乗っていないかった。

「賑やかな場所に疲れちゃいましたね。田舎暮らしでもしようかと」

「はえ、まだ若そうなのに苦労してんだねえ。でも、この先の村は人類圏の最南端で、S級冒険者でないと生きていくのも難しいし、それにだからといって何もありやしないよ。出てくる魔物も瘴気しやうきに当てられて狂暴化しているやつばかりだ。それに魔族と出会おうもんなら目も当てられねえ。長居はおすすめできないよ」

「ある意味、観光みたいなものですな。すぐにまた別の場所にも行きますよ」
本当は、その村のさらに先が目的地なわけなんだけど。

それからさらに馬車に揺られること二日。この馬車の終着である村に着いた。

「それじゃ、お兄さんに陽光神様の加護があらんことを」

「ありがとうございます。陽光神様の加護があらんことを」

御者に別れを告げた俺は、しばらくその背を見送る。一緒に降りた老人は、気が付くとどこかへ消えていた。こんな場所までなんの用だったのだろう。

村というから人が住んでいるのかと思ったが、廃村だった。長い年月でボロボロに風化した居住地に、ほとんど更地さらちに戻った畑。冬の気配を匂わせるからつ風が良く似合う場所だった。

こんな辺鄙な場所でも、年に数人は人が訪れるらしい。理由を聞いてはいけなそうな雰囲気の人がほとんどのようだ。

その点、御者に話しかけられた俺は例外なのだろう。事実、御者は怪しげな老人には声をかけなかったわけだし。

「さて、確かこの先か……」

少し歩くと、地面の色が黒くろずんできた。魔素まそが濃くなってきた証拠だ。

この世界は魔力で溢れている。空気中にも存在するし、生物も皆魔力を内包している。魔力の使い道は主に魔法だ。魔法が一般的に使われるこの世界において、なくてはならないもの。それが魔力。

一方、魔素とは、魔物以外の動植物にとって有害となる空気中の物質だ。しかし、魔物はその魔素を好む。魔素が濃くなるほど、強い魔物が蔓延り、危険性が増す。さらに、魔素濃度が高くなると、空気中の魔力を汚染し、高い魔素耐性を持たない者はその汚染された魔力を体内に取り込んでしまうことで息をすることすらまもなくなくなる。

魔素と魔力とは、互いに浸食し合う敵対関係のようなもので、濃い魔素が魔力を汚染するように、良質な魔力は魔素を浄化する。

人類圏と呼ばれる範囲は、空気中の魔素濃度が著しく低く、それに伴って強い魔物も出にくい。魔素耐性が低い人たちでも、比較的安全に暮らせる領域をさす。

さらに森を奥へと進むと、周囲の木々は黒い葉が交じり、空気をもつたりと重たくなる。空を見上げれば、一面の青だというのに、進めば進むほど辺りの色彩が掠れていく。

時折聞こえてくる鳥の囀りも、いつの間にか魔物特有の、空気が震える悍ましい鳴き声に変わっていた。

それもそのはず。この辺りは相当の魔素耐性がなければ、既に呼吸もままならない。空気中の

魔素が他の場所よりも著しく多い森——通称、魔素の森。もちろん人気は一切ない。しかし、S級冒険者の指名依頼の多くが、こういった常人には耐えられない地域の素材集めや魔物の討伐のため、俺にとつては見慣れた景色。ここで出会う人間すなわち、S級冒険者がそれに相当する者ってことだ。

数日間、俺は魔素の森を彷徨った。当てがないわけではないのだ。ただ、探している目的地が本当にこの森に実在するのは不明だ。

以前、知り合いのS級冒険者から聞いたことがあった。遙か南方、魔素の森の奥深くに精霊の宿る聖域を見た。大袈裟な話だとは思いつつも、冒険者の内では有名な話らしい。わざわざ、そんな噂話のためにこんな南方まで来るようなS級冒険者はいないだろう……俺以外。

荒れた森を進むと、前方にぼやっと明かりが浮かんで見えた。一瞬、魔物かと思つて警戒したが、どうやら違うらしい。

近づくにつれて、空気が湿り気を帯びてきた。心做しか周囲の気温も高く感じる。

木々の間を抜け、視界が開ける。その場所を一目見て、悟った。ここが噂の聖域とやらなのだろう。

陰鬱な森にぼつかり存在する平原。足を撫でる草が一面に敷かれ、宙をふわっと漂う色とりどり

の花弁^{かべ}。何より目を惹いたのは、聖域の中央にある大きな魔力溜まり^{まりどくだ}だ。魔力溜まりとは、魔力が多く含まれている水辺をさす。ぼんやりと光を放ち、ゆらりと湯気が立ち込めていて、まるでそこだけ霧^{きり}がかつているようだった。

「温度が高い魔力溜まりか。珍しいな」

そう独り言^{ひとりご}ち、一步を踏み出した刹那^{せつな}、

「——誰!？」

霧の中から声が聞こえた。ぴりつとした気配を感じ、すぐに魔法を発動できるようにとつさに二本指を立て構える。

黙っている、霧の向こうからさらに言葉が投げかけられる。

「……小鬼^{ゴブリン}を逃がせば？」

俺は間髪^{かんはつ}容れずに合言葉^{あいごたば}を返す。

「村一つ」

冒険者の間で使われる、互いに魔物や魔族ではないと確認する典型的な諺^{ことわざ}。駆け出しの冒険者でも倒せる小鬼^{ゴブリン}ですら、逃がせば繁殖^{はんしよく}して、いつかは村一つを滅ぼすくらい脅威^{きょうい}になるという意味だ。

「よかった、人間なのね」

そんな返事が聞こえると同時に、肌を刺す殺気が消えた。それを感じて俺も同じように放った殺気を緩める。むろん、魔法はいつでも発動できるようにしているが。

「冒険者一人だ。そちらは？」

「同じよ」

この環境下で一人。つまり、俺と同じようなソロのS級冒険者だろう。

「まさかこんな場所で人に出会うとは思わなかったわ」

「……俺もだ」

「あ、まだこっちに来ないで。ちよつと待っ——」

運良くか、運悪くか、強い木枯らし^{こが}が吹き、立ち込める湯気が逃げ場を得て霧散^{むさん}する。鮮やかな青色をした大きな魔力溜まりの中に、少女が立っていた——白磁^{はくじ}の肌を晒した一糸纏^{まと}わぬ姿で。

「えっ？ 精霊？」

ついさつき人間だと確認し合ったというのに、俺は無意識で口にしていた。

まるで御伽噺^{おとぎばなし}に出てくる水の精霊を思わせる美少女だ。くつきりとした大きな翡翠^{ひすい}の瞳に、鼻が高いはつきりとした顔立ち。ほんのりと赤く染まった頬は、鮮麗な顔立ちにどこか少女らしい柔らかさを残しているように思えた。華奢な身体にもかかわらず大きな存在感を見せていた胸元に、濡れた長い銀髪^{ぎんぱつ}の先が張り付いている。妹と同じくらいに見えるから、十七、八歳くらいだろう。

しばらく、周囲に沈黙が流れる。
なんだろう、この状況。

「……す」

うつむいた少女が小さく呟いた。

「なんだって？」

聞き返した俺の声が届いているのか分からないが、少女の握った拳がぶるぶると震えているように見えるのは気のせいだろうか。

ゆっくり魔力溜まりから上がった少女は、そばに置いてあった刀身の細い剣を手取る。

「……ろす——殺してやるッ！」

刹那、肌を焼くような少女の殺気を浴び、自然と俺の身体が動いた。

距離を取るために大きく飛びのいた途端、視界から少女の姿が消える。次の瞬間には、少女は目の前にいた。そして、既に突き出されていた細い剣先が、未だ宙にいる俺の喉元に迫っていた。

速すぎんだろ……ッ！

俺は空中で無理矢理身体を捻る。地面に足が付くと同時に、俺の頬を少女の剣が掠めた。息を吐く間もなく、次いで、下から扶くような蹴りが飛んでくる。細い足だというのに、どうしてかまともを受け止めては駄目だと本能が警鐘をかき鳴らす。

俺がかざした左手に少女の足が触れた瞬間、俺は右腕を振り下ろした。

——『固定』。

『固定』は俺の固有魔法で、はたから見ても何が起きているのか分からない。ただ、俺が魔法を詠唱した瞬間、俺の左腕と少女の右足が衝撃もなく、ピタリとくっつく。

「えっ……!?」

少女から戸惑いの声が漏れた。

俺はすぐさま、今度は彼女の左足とそこに触れる若草に向けて『固定』を発動した。そして、剣を持つ少女の右手首を掴む。すると、少し、静電気のような痛みを感じた。

「ちよっと、なんの魔法よ、これ！」

「お、落ち着いてくれ。その、揺れてるから……！」

何がとは言わないが、それはもう水の入った風船の如く。

しかし、少女にはなんのことも伝わっていないらしい。掴んだ手首から伝わる電気の強さが増した。

あれ？ 触れたままだと……まずいっ！

俺はほとんど反射的に自分の左手の『固定』を解除して、彼女から身体を離す。彼女が魔法を発動する気配を感じた刹那、空気が震えるほどの稲妻が少女の身体を包み込む。

「ふんっ！ くだらない時間稼ぎはおしまいよ！ さっさと串刺しにしてあげる！」

少女は肩の上で細剣^{さいけん}を引き絞り、右足を後ろへと下げる。そして、先ほどのように彼女が一瞬にして視界から消え——ることはなかった。

棒のように固まった自分の左足がもつれ、彼女は顔から盛大に地面に落ちる。まるで、びたん！ という効果音でも聞こえてきそうだ。代わりに聞こえてきたのは彼女から漏れたであろう、「ふぎゅっ！」という小さな声だった。

彼女の身体に纏われていた稲妻がすつと空気に溶けてなくなる。

俺はそつと、彼女の左足にかけた『固定』を解除した。

ようやく、辺りに静けさが戻った。全裸で地面にへばりつく少女と、それを意味もなく眺めて突っ立つ俺。自警団さん、こっちです。

結局、この後話を聞いてもらえず、同じようなことを半刻ほど繰り返す羽目になった。

とりあえず、服を着てくれ。

徐々に涙目になりつつある少女を見て、そう思わざるを得なかった。

力なく地面にへたり込んですすり泣く裸の少女と、目をそらずにそれをじっと見つめる二十歳の男性。さて、どちらが悪者でしょうか。

聞くまでもない。たとえ、この状況がほとんど事故のようなもので、いつ少女が文字通り光速で

剣を突き立ててくるか分からないから目が離せないとしてもだ。

「いや、もう俺が悪かったよ。とりあえず、これ着てくれ」

俺は脱いだローブを少女の肩にかける。

「……私が悪いの」

「そんなことない。事故だよ。あんな状況じゃ、敵意だつて出るさ」

「違うの。私が弱いから、裸を見たあなたを殺せなかった」

「そっち!？」

ため息が白く零^{こぼ}れて、空へ昇っていく。

「とりあえず、落ち着いて話さないか？」

俺の問いかけに、少女はうつむきながら静かにうなずいた。剣を手から離れたところを見るに、もう戦意はないらしい。そこでようやく、俺は構え続けた二本指を下ろす。

「俺の名前はロア。家名はない。あんたは？」

「……ユズリア・フォーストン」

名前を聞いた途端、俺の背中に冷や汗がどばつと出た。

家名持ち。つまり、貴族だ。それもフォーストン家といえば、十年暮らしていたパンプフォル国で知らぬ者はいない名家だ。

「き、貴族様であられましたか」

俺は引きつる口角を必死に抑える。貴族に手を出したとなれば、重罪どころの話ではない。即刻、打ち首ものだ。

スローライフ、終わっちゃったな……あ、まだ始まってすらいなかった……

ユズリアが不貞腐れたように顔を上げる。

「今さら、そんな扱い意味ないから」

「デ、デスヨネー」

土下座か!? それとも、俺も脱げばいいのか!?

「せめて、妹だけは……」

そうだ、妹だけはなんとしても守らなければ。兄が貴族様の裸を見たせいで妹も共に殺されたとなれば、あまりに不憫すぎる。ただでさえ、妹は最近ずっと俺に冷たいというのに。死んで地獄に行ってもなお変態と蔑まれたら、きつと俺はどうかしてしまう。

「別にどうもしようと思っただけだよ。それより、私がロアに命乞いする方が正しいでしょ」

確かにこの場所には俺とユズリアの二人だけ。目撃者がいないのだから、ここでユズリアを始末してしまえば、事件は闇に葬り去られるというわけだ。

赤くした鼻をすんと鳴らし、ユズリアは潤いの残る瞳で俺を見つめる。

「そんなこと、できるわけがないですよ。こんな精霊のように美しく、可愛い貴族様に」

「なっ……! とりあえず、敬語やめて! あと、その貴族様つてのも!」

温情か、照れ隠しか、ユズリアは顔を真っ赤に染めて目をそらす。

とりあえず、お咎めなしということでもいいのだろうか。

「それでは失礼して。この森にいることは、ユズリアもS級冒険者なのか?」

俺は自分のギルドカードをユズリアに見せながら問う。

「……そうよ。といっても、S級になったのはつい最近。今回だって、依頼を受けてここに来たわけじゃないの。ちゃんと自分にその資格があるのかどうか、試しに来たのよ」

「なるほど。自分の力を過信しないのはいいことだ。S級の依頼はどれもS級冒険者しか生き延びられないような理不尽な環境と、強大な魔物の討伐を強いられるからな」

ユズリアがロープで全身を隠したことを確認すると、俺もその場に座り込んだ。常に張り巡らせていた神経と強張らせた筋肉を緩めると、どっと疲れが湧いてくる。

「でも、結局魔素がキツくて、たまたま見つけた魔素が全然ないこの空間で休んでたわけ。おまけにこのこやつてきた変態にコテンパンにされるし。本当、最悪な一日ね」

「頼むから変態はやめてくれ……魔素がキツイなら、人気のあるところまで送っていいとか? この辺りは魔物も特に強いから」

確かにユズリアはS級と言われても納得のできる強さだった。そこら辺のA級なんか話にならないだろう。ただ、彼女の言った通り、S級の中で高い位置にいるとは言えない。

A級とS級の間の壁は厚く、S級同士にも序列は存在する。なぜなら、S級以上の等級が存在しないので、そこから上は青天井だからだ。

「この森を抜けるくらい、ロアの力を借りなくてもなんとでもなるわよ。それより、ロアはどうしてこんな辺鄙な場所にいるの？ 依頼？」

「なぜって、それはここに住むためだよ」

「……何、言ってるの？」

「だから、移住してきたんだよ。俺は冒険者を引退したんだ」

ユズリアが心底怪訝そうに顔をしかめる。こいつ馬鹿なんじゃないのか、とでも言いたげだ。

「冒険者になって十年、働き詰めで疲れちゃってね。肩の荷も下りたし、人の来ない場所ですばらくゆっくりしようと思ってるさ」

「なんだかエルフみたいなこと言うのね。エルフは長い寿命の大半を自然の中で緩慢に生きるらしいし。まあ、ただのエルフはこんな魔素に塗れた森は選ばないと思うけれど」

「だからこそ、ここを探していたんだ。聖域なんて噂されていたけれど、どうやら濃度が高い魔力溜まりがある土地のようだね」

立ち上がり、魔力溜まりを覗き込む。透き通った濃い蒼の水。温かく、触れた先から魔力が浸透してきて心地がいい。

色々と合点がいった。魔物以外の生物にとって有害とされる魔素で塗れた森に、なぜこんな瑞々しい若草とたくさんの花々が咲き誇っているのか。そして、なぜここに近づくにつれて魔物の気配がどんどん減っていったのか。

良質な魔力溜まりが、周囲の魔素を浄化して、新たな生命をもたらしているのだ。また、魔素の森の魔物は魔素を好むがゆえに棲みついている。つまり、魔素を浄化するような強い魔力をめぐばう嫌う傾向があるのだろう。

それにしても、光を放つほどの魔力溜まりなど見たことがない。軽く触ただけで、先ほどユズリアとの小競り合いで使った魔力がほとんど補充されてしまった。聖域という表現もあながち間違いないのかもしれない。

「確かにここなら普通の人はまず辿り着けない。それに、とんでもなく辺境だからS級冒険者も依頼ではあまり訪れないんじゃないかしら。ここまで来るだけでも一苦労だし、誰もそんな場所の依頼は受けたくないでしょ」

そう言いながら、ユズリアも俺の隣で泉を覗き込む。

「どんなもんか、見てから判断しようと思ってただけだね」

人が寄り付かず、魔物も嫌う辺鄙な場所。まさに俺が想像していた理想の地だ。

「よし、決めた。俺はここに住むとしよう！」

俺の一人スローライフはこの土地から始まるんだ！

「……そう。じゃあ、私も一緒に住む」

「そうか！ 独り占めは良くないもんな！ うん……うん？」

今、彼女なんて言いましたかね。すむ？ 澄む？ 済む？

「そうになると、住居に衣類、食料とか色々必要になるかな。やっぱり、一度帰るべき……？ いや、でも……」

いや、ユズリアが何か不穏なこと呟いてるんだけど……

「え？ 本当にここに住むのか……？」

「そうだけど？ 何か問題でも？」

「いや、問題は……ない」

ないけど！ あるわけもないんだけど！ いや、あるかも！

誰の土地でもない場所に、たまたま一人で暮らすことを決めた人間が二人いるだけだ。幸い、魔力溜まりを中心に広がる聖域は十分な広さがある。過度な干渉をしないようにユズリアから十分に距離を取って生活をすればいいだけだ。

まだ、俺の一人スローライフは潰えていない！

「じゃ、取り急ぎ同居用の家をつくらないとね」

ユズリアがさも当たり前のように言った。

「同居？」

「えっ？ 違うの？」

「一人で住むんじゃないのか？ なんて言うか、ご近所さんの感じで」

「そんなわけないじゃない。ロア、私の裸見たんでしょ？」

「どうして今、その話が――」

そこまで口にして、ユーニヤが以前話していたことを思い出した。えっと、なんだったか。貴族には掟^{おきて}みたいなのがあって、その中の一つに――

「貴族は婚前に異性に全てをさらけ出すことを禁ずる」

ユズリアがぼそっと呟いた。

「それって、つまり……」

駄目だ。悪寒^{おかん}が止まらない。

「ロア、あなたは私の……は、はん、伴侶^{はんりよ}になりなさい……っ！」

顔を真っ赤にしながら、とんでもないことを口走るお貴族様。まっすぐに指をさされる二十二歳

無職。

こうして、俺の一人スローライフは始まることすらなく、終わりを迎えたのであった。

結論から言おう。

一人スローライフは諦めた。しかし、ユズリアとの婚姻には絶対に首を縦に振らないと、自分自身に誓った。

そもそも、平民と貴族が結婚ってなんの御伽噺だよ。そう思ったが、S級冒険者ともなれば、貴族とまではいかなくとも、それなりの地位は保証される。実際、貴族と結婚したS級冒険者も過去にはいたらしい。

とはいえ、俺もそれに倣って、「じゃあ結婚します」だなんて、そんなこと口が裂けても言えない。

だから、俺はユズリアに抵抗するべく、自分の口に『固定』をかけ続けた。小一時間、無言を貫くとユズリアも流石に一旦は諦めてくれたようだ。

「別に急ぐわけでもないし、ロアがその気になったらでいいわよ。ただし、逃げたり、他の女にほいほいつられたりしたら、全部お父様に話すから」

代わりにそんな脅迫まがいの台詞を突きつけられた。どうやら、退路は完全に断たれたらしい。

しかし、有耶無耶にし続ければ、ユズリアもそのうち忘れるか、飽きてくれるだろう。それまでの辛抱だ。

急に結婚だなんて、考えられもしない。なんたって、俺は異性経験ゼロだからな！

野営を組み、携帯食料で腹を満たす。とりあえず、今晩は魔物の夜襲に備えて交代で見張りをすることにした。いかに魔物が寄ってこない場所とはいえ、俺たちのいるこの聖域の周辺は魔素の森だ。小さな村なら軽々壊滅させるような魔物がうじゃうじゃいる。

最初の見張りは俺がすることにした。俺はまだユズリアを完全に信用したわけではない。今横になったところで、安心して眠れるはずがなかった。

しかし、それはユズリアとて同じ話……だと思っていたんだけどなあ。

寝ころんだユズリアは、ものの数分で小さな寝息を立て始めた。

彼女の顔に疲労が浮かんでいることは、聖域で出会った時から分かっていた。S級冒険者になりたてなのに、魔素の森を一人でうろついていたのだ。きっと、夜だつて眠れずに何日も過ごしていたのだろう。

魔物の気配を肌で感じながら眠る恐怖は計り知れない。だからこそ、冒険者は他の冒険者たちとパーティーを組むのだ。ただ、パーティーを組めるのは同じ等級の冒険者とだけだ。なぜなら、依頼は等級ごとに分けられているため、異なる等級の冒険者とは一緒に依頼を受けることができない

からである。S級冒険者ともなると、その絶対数が限りなく少ないため、パーティーを組むことが非常に難しい。そのくせ、S級しか受けられない依頼は多いため、必然的に一人で危険な地へ行くことが多くなる。一人の時、いかにして身体を休めるか、その術は経験で培^{すべ}っていくしかない。

しかし、聞けばユズリアはまだ十七歳らしい。この歳でS級まで上り詰める冒険者など指折りだ。きつと、まだまだ成長を続けるのだろう。だからこそ、貴族の掟^{おきて}だとかはさっさと忘れてほしい。大体、俺とユズリアしかいなかったのだから、互いになかったことにすれば済む話だ。でも、彼女の貴族としてのポリシーはそれを許さないらしい。

それとも、俺との結婚には何か別の理由があるのか。大貴族のお嬢様がわざわざ冒険者をやるなんて類を見ないことだ。おそらく、触れづらい事情も少なからず抱えているのだろう。

そつと、ユズリアの額に手をかざす。

——『固定』。

あまり気が乗らない使い方だけど、これでユズリアは『固定』が解除されない限り、起きることはない。

「若いうちは、たくさん寝るに限るよな」

俺もまだ若い方に分類されると思うけど、ユズリアと同じ年の妹からはおっさん臭いと言われたからなあ。

魔力溜まりは夜だというのに、ぼんやりと光を放ち続けている。なんなら、若干眩^{まぶ}しいくらいだ。触れるだけで魔力が急速に身体へ流れ込んでくるほどの高濃度。光を放っているのは浄化の力が働いているためだろう。まるで魔力ポーションと聖水を掛け合わせたような泉だ。

魔力ポーションは体内の魔力を回復させるために人工的につくられた液体で、聖水はあらゆる状態異常を治すことができるものだ。市場^{しじょう}では、どちらも高値で取り引きされている。だから、この泉の水を瓶に詰めて売るだけで、屋敷が建つくらい稼げそうだ。

「いかん、いかん。また金のことばかり考えている」

この十年。ひたすら金銭のことを第一に考えて行動してきたせいだ。こういうのを銭ゲバっていうんだったか。我ながら、悲しい青春を過ごしたものだ。

きつと、人のいない場所で生活したいという欲が無性に強いのも、間違はなく銭ゲバ生活のせいだろう。

でも、今は何も気にせず、思うままに過ごしていいのだ。

満天の星空と温かな空間。そして、多分、きつと、おそらく、maybe、probably、perhaps、もう誰も来ない土地！……あと一応、可愛い同居人。

あれ？ 結構、完璧なスローライフ環境ではないだろうか。一応、危険度S級の場所ではあるけれど。

俺は大きく息を吸い込んで、吐く。胸につつかえていた重りがようやく外れたようだ。やっぱり、今日は眠気なんて来そうにない。

俺は足を泉に浸し、相変わらず下手くそな鼻歌を奏（かな）でるのであった。



まるで寝覚めをせき止めていた何かがふいに消えたように、意識が濁流（にごりゅう）の如く脳を揺らした。覚醒（せい）に至らない微睡（まろみ）の中、私——ユズリア・フォーストンは鼻腔（びこう）をくすぐる香りに空腹を刺激される。そろそろ、ロアと見張りを変わらなきゃな……

唼（また）をすり抜けて感じる朝焼けの気配。頬をなぞる若草もどこか湿り気を感じた。

そう思い、ようやく矛盾に気が付く。

あれ？ 今って……

ぱっと目を開けると、周囲の明るさに少しだけ眼球の裏がきしきしと痛みを感じる。未だはつきりしない脳が、状況を必死に読み解こうとしていた。

陽が出てる？ あれ？ なんて……

冒険者が寝過（い）ごすなんて絶対にありえない。確かに私は四時間で起きて、丑三（うしみつ）時から朝まで見

張りをするつもりだった。どんなに疲労が蓄積（たくじく）していようが、魔物の蔓延（まんえん）の地で熟睡（じくすい）なんてするはずがない。

じゃあ、どうして今が朝なのだ。

勢（せい）よく身体を起こすと、すぐそばに腰かけていた男がその気配に気が付き、振り向く。

「おはよう」

何気ない一言だった。実に白々しい。

「……ロア、私に何かしたでしょ」

「さあね」

ロアは口元に小さく笑みを浮かべ、湯気の立つ鍋（なべ）を玉杓子（たまじやくし）でかき混ぜる。ロアが私に魔法（まほう）か何かを仕掛けたことは明白だ。でなければ、私が起きられないなんてことは考えられない。

ロアは一言で言えば奇妙な人だ。こんな何もない土地に住むとか言い出すし、何より、珍妙（ちんみょう）な強さだった。ひよろひよろな身体なのに、武器も持たないで、私を圧倒（あつぱく）した。それもまぐれの一度や二度じゃない。この人には勝てない。そう心から思われるほどだった。

人間の四肢（し）など簡単に吹き飛ばす蹴（き）りも、鋼（こう）のように固い魔物の鱗（うろこ）も貫く剣撃（けんげき）も、私の攻撃（こうげき）全てが、ロアに触れた瞬間（しゅんかん）すっと吸い付くように衝撃（しょうげき）すらなく、彼（かれ）とくっ付いた。さらには、ロアに触れていない足まで棒（ぼう）のように固まって動かなくなる始末（しまつま）。相対（さいたい）したことのない魔法（まほう）だった。もしロ

アに殺意があったなら、本当に手も足も出ずに首をはねられていただろう。

ぞっとした。同じS級冒険者だとは思えなかった。

私が弱すぎる……？ いや、そんなはずはない。滅多に人を褒めない師匠にだって、胸を張っていいと太鼓判を押されたくらいだ。

初めての人類圏外、S級冒険者かそれに相当する実力の者にしか生存が難しいS級指定地帯で、さらに不眠でパフォーマンスが落ちていたとしても、私があんなボロボロに負けるはずがなかった。しかし、きつと、万全の状態でも戦っても結果は変わらないだろう。

ロアならば、あの人に勝つことも可能かもしれない。

改めて、ロアを見る。背は私より頭一つ高く、人族には珍しい黒髪、そして黒目。お世辞にも褒められない筋肉量の身体。身体を纏う魔力のオーラはそこら辺の商人と同じくらいだ。とても冒険者には見えない。落ち着いた顔立ちで、元の素材は悪くない。十分整っていると思う。むしろ社交界の煌びやかさにうんざりしていた私には、特別で魅力的に思える。

「ロアの魔法って、一体なんなの？」

私の純粹な問いに、ロアはスーブを器によそいながら、「うーん……」と軽く首を傾げる。

「魔法は極力人に教えない方がいいって習っただろ？」

「いいじゃない。これから生涯一緒なんだし」

見合い話にうんざりしていた私にとっては、ロアと結婚し、この土地で暮らすことはむしろ好都合だ。ロアは引退したと言っているが、ギルドカードは返却していないし、S級冒険者で地位も確立されている。さらに、私を圧倒する強さ。そして、自分を殺そうとする相手を女だとしても絶対に傷付けない人柄。まあ、これに関しては、私と同じようにその優しさに付け込む人が現れそうでは少々難みはあるのだけれど。

あの時は勢いで伴侶になれなんて言ったものの、冷静に見ても超優良物件だ。

「結婚の話、まだ続いてたんだ……」

「当たり前でしょ。ロアは私の裸見たんだから。あー、お嫁に行けなくなっちゃったなあー」

「うぐっ……」

ロアは観念したのか、黙りこくって私にスーブをよそった器を差し出す。じんわりと器から温かさが冷えた手に伝わる。

「だからほら、教えてよ。もちろん私の魔法も教えるから！」

私がそう言うのとロアはちよつと嫌そうに顔をしかめた。そして、軽いため息を吐いて口を開く。

「昨日、ユズリアに使ったのは『固定』って魔法。指定した物体と物体を文字通り固定するんだ」

ロアが右の人差し指と中指を立て、シュッと振り下ろす。そして、器を載せた左手のひらを鍋の上で逆さにした。器は彼の手から離れず、中身のスーブだけが鍋に落下する。私は手を伸ばして器

を引っ張ってみるけれど、びくともしない。

「へえー、面白い魔法ね」

「範囲は限られるけれど、目に見えているもの同士なら自由に発動できるよ。例えば、ユズリアの靴とそれに触れている草をくっ付けたりね」

ロアがもう一度、右手を振り下ろす。彼が私の右足を指さすから、足を上げてみると、靴の中で足を動かすことはできるけど、靴自体を地面から上げることができず、まるでびくともしない。重いつか、そんなんじゃない。魔力の通っていない攻撃を防ぐ魔法である物理障壁を手で押すような、絶対に動かすことのできない、そういう感覚だ。

「他の使い方もあるけど、主な使い方はそんな感じ。もちろん、弱点もある。見えていない箇所、今だとユズリアの足自体は見えていないから、指定することはできない。だから、靴を指定するしかない。脱げば、簡単に抜けられてしまう」

濁した他の使い方とやらが気になるところではあるが、どうせ聞いても教えてくれないのだろう。私は靴から足を引き抜く。確かに、足自体に魔法がかかっているわけじゃなかった。

「でも、そうしたら今度は私の足を指定できるじゃない」

「もちろん」

「やっぱり、弱点なんてないじゃない」

「も、もちろん？」

思わず息が零れる。なんて地味で、そしてなんて理不尽な魔法なのだろう。

「効果時間は？」

「俺が解除するまでずっと。もしくは、『魔法除去』リリースマジックをかけられるまでかな」

『魔法除去』は魔法による麻痺まひや毒といった状態異常を解くための、冒険者には必須の魔法だ。ただし、発動までに短くとも二十秒はかかる。二十秒もあれば、S級冒険者が相手の命を奪うことなど容易い話だ。

「はあ……ロアが化け物だっことはよく分かったわ」

「そうでもないよ。俺が視認しにんできない速さで心臓を貫かれれば終わりだし、何より、視界が奪われたら『固定』は発動できない」

「……確かに」

「まあ、もちろんそれなりに対処法はあるから、あまり問題はないんだけどね」

「もしかして、まだ他の魔法か何か隠してる……？」

ロアがゆっくり目をそらす。これは、まだ手の内を隠しているな。当たり前になんか感じた。

「ユ、ユズリアの魔法はなんなんだ？」

若干、上擦うあずった声のロアにわざとらしく眉をひそめておいた。まあ、いい。隠している手札も、

そのうち見る機会はあるだろう。

「私は『雷撃』と『身体強化魔法』の組み合わせね。ロアは知っているを思うけど、雷を自在に操ることができるのが『雷撃』で、身体能力を何倍にも跳ね上げるのが『身体強化魔法』よ」

「なるほど、『身体強化魔法』か。どうりで、あの速さに身体が耐えられるわけだ」

スプーンが器の底を叩く。気が付けば、よそでもらったスープは全て胃に収まってしまっていた。

小さく微笑んで手を差し出したロアに、私は少し照れながら器を渡した。ロアが追加のスープをよそう。

「誰かさんに動きを止められちゃ、なんの意味もないけどね。こんなことなら、閃光でも放ってロアの目を潰しておくんだった」

「ははっ、そしたら俺はユズリアに貫かれるしかなかったね」

「それなりに対処法があるんでしょ？」

「あるけれど、俺がそれを人間に使うことはないよ」

ロアが視線を落とす。前髪がその悲し気な瞳を暗く隠した。

「自分の命がかかっているでも？」

「そうだね」

「じゃあ、私の命がかかっていたら？」

「……流石に使っちゃうかな」

そう言いながら、ロアは頬をかく。

ある程度ロアの返答は予想していたが、自分より私を大切に思っているかのような発言に胸が高鳴り、自分の顔が熱を帯びるのが分かった。

「もういいだろ？ さっ、飯食い終わったら、家でもつくろう」

気まずそうに話を切り上げて背を向けるロアから、しばらく目が離せなかった。



さて、それではスローライフの第一歩として、家をつくらうと思う。

衣食住。どれも大事だが、火急を要するのは住まいだ。衣類に関しては問題ないし、食料もまだストックがある。尽きたら魔物を狩りに行けばいい。魔素の森に入ってから、食用にできそうな魔物は何体も見た。

「というわけで、まずは家をつくらうと思うんだけど、本当に俺とユズリアの二人で住むのか？」
「あつたりまえじゃない」

「あつたりまえなんだ……」

「でも、家をつくるって、ここには私たちしかないのよ？ 大工を連れてくることもできないし」

ユズリアの疑問は当然だ。もちろん、貴族の彼女に建築の知識があるとは思えない。

「俺が建てるから、安心してよ。ユズリアには木材を調達してきてもらおうかな。木ならそこら中に余るほどあるし」

ユズリアは眉にしわを寄せて黙りこくっている。いや、呆^{あき}れているのだろうか。

「木が切り倒せないなら、俺がやるけど……」

「馬鹿にしないで。それくらい『身体強化魔法^{バミューム}』があればできるに決まってるわよ！ そうじゃなくって」

「むっ、他に何か？」

「家って、道具がないと建てられないのよ？ 一般教養を受けてないにしても、常識だと思うのだけれど」

なるほど、彼女はそっちの心配をしていたのか。それにしても、貴族のお嬢様に庶民的な常識を論^きぜられるとは恐れいった。

「その心配ならご無用。とりあえず、設計図を考えているから、材料の木を持ってきてもらえる

かな」

「……まっ、私にアイデアがあるわけじゃないしね。伴侶の世迷言^{よまじご}にも妻が付き合っ^あてあげるとし
ましよう」

「まだ言ってる……」

ユズリアは意地悪そうに舌を出して森の奥に足を踏み入れる。おい、可愛いな、やめてくれよ。
その背を見送りながら、声をかける。

「あんまり遠くへ行くなよー！ 危なくなったら、大声で呼べー！」

「私だってS級よ！」

そんな反論が木々の奥から返ってくる。どうにも、ユズリアが同じS級冒険者だと忘れそうになる。昨日なんて、一歩間違えれば初撃でユズリアに喉元を突き破られていたというのに。

その状況を思い出して、背筋^{せすじ}が冷えた。なるべく、怒らせないようにしよう。それがいい。妹
だって、ぶち切れると手の付けようがなかったからな。その点、ユーニャは大人しくて可愛いも
んだった。

少し距離が離れたところで、雷鳴が天を貫いた。次いで、木々が倒れる振動が地面から伝わる。
こうしちゃいられない。さっさと大まかに設計図をつくってしまおう。パンプフオール国での住
まいは、五年ほど前に土地だけ買って自分で建てた家だった。今回もなんとかなるだろう。

その後、何度か同じように雷が瞬き、ユズリアが戻ってきた。

「とりあえず、これくらいでいい？」

そう言いながら、樹齢数百年はあろう巨木を、四本まとめて軽々引きずってくる華奢な女の子。うん、やっぱりユズリアを怒らせては駄目だ。

「あ、ありがとう……多分、足りると思う」

「でも、この木は魔素を十分に吸っちゃってるから、使えないんじゃない？」

確かにユズリアが持ってきた木々は幹も葉も魔素によつて黒々と染まっている。魔素を含んだ木材は耐久性が下がり、一般的には資材として使うことができないとされている。

「とりあえず、泉の中にぶち込んでみようか。それで駄目なら、他の方法を考えよう」

「それもそうね」

ユズリアはひょいっと一本の巨木を持ち上げ、泉に突き刺す。深さが人の腰辺りまでしかないから、巨木の根本が浸かるだけだ。しかし、次の瞬間、泉に浸かった部分がすつと鮮やかな黄櫨色に染まり、ぐんぐんと上の方まで色が変わっていく。ほんの数秒で幹が浄化され、葉も緑のみずみずしさを取り戻してしまった。

「す、すごいな……」

思わず声が漏れる。

「これ、ただの魔力溜まりじゃないわよね……」

泉の正体は謎に包まれたままだが、すさまじい浄化能力を持つていることが分かった。

四本の巨木を全て浄化した後、その巨木を家をつくるのに使える形へとユズリアに成形してもらう。彼女が細い剣一本で木を加工する様子を職人たちが見たら、怒り狂って襲いかかってきそうだが、今だけは目をつむってもらおうとしよう。そもそも、専用の道具もなしに巨木を綺麗に断ち切るなんて、『雷撃』を使いこなす彼女にしかできない芸当だ。人間とは思えないことを次々こなしているんだから、もっとその豊かな胸を張ってくれていいのに。

「それで、結局ここからどうするのよ」

目の前に山盛りになった様々な寸法の木材を見て、ユズリアが疑問を投げかける。

「まあ、見てなって」

俺は柄にもなく腕をまくる。そして、柱となる大きな木材を掴み、グッと力を入れた。そう、思い切り、踏ん張って、使えもしない『身体強化魔法』の術式を胸の中で唱えて、せーのッ！

……………

しばしの沈黙。遠くから、鳥型魔物の甲高い鳴き声が聞こえてきた。

うん、無理！

ほとほと呆れ顔のユズリアに木材を持ってもらう。

なんか、本当にすんません。

尊厳の欠片かけらもない自分に涙を流しながら、木材と木材のつなぎ目に『固定』をかける。

『固定』には対象同士をくっ付ける効果に加え、硬化作用も働く。だから、これで俺が『固定』を解除しない限り、どんな衝撃を受けようが、地震に襲われようが、魔法に包まれようが、木材が離れることはない。

「へえー、これなら確かに家を建てられそう。本当、とんでもない魔法ね」

ユズリアが感嘆かたんの声を上げるが、俺は元々ない胸すら張る気にならなかった。

「僕、くっ付けることしかできないんで……へへっ……」

「一人称変わってるじゃない……」

そんなこんなで、ユズリアに木材を持ってもらい、俺が『固定』をかけて、組み立てる作業を繰り返す。ユズリアに間取りの希望を聞きながら、都度設計を変えていき、数日かけてようやく念願の家が完成した。

天井の高い一階建てのウッドハウスだ。玄関を開けてすぐに広い居間リビング。その横に調理場キッチンを設け、反対には大きめの風呂場バスルーム。居間の奥に寝室を二部屋。各所に光の魔石を取り付け、寝室のベッドには魔素の森に棲むAランク相当鳥型魔物の高級羽毛でつくった枕と敷布団マットレス。調理場と風呂場には火の魔石と水の魔石を取り付けておく。魔石は、魔力を流せば誰でも光らせた火をおこせたり水を生

成でできたりする便利な代物だ。

文句の付けようのない完璧な一軒家（最高の庭付き）。寝室が二つあることに首を傾げてはいたが、ベッドは大きくしたいなど、ユズリアの要望にも沿った満足のいく出来。まさにスローライフに相応しい。

「で、できたー！」

「ああ、今日からここが俺たちの住まいだ！」

まだ閑散かんさんとした居間に二人で身を投げ出して大の字になる。天井を高くしたおかげで随分と開放的な気分だ。深呼吸をすると、魔素の森に生えていたとは思えない芳醇ほうじゅんな木の香りが肺を満たす。

横目でユズリアの様子を窺うかがうと、彼女も満足げに目を細めていた。

「でも、まだ色々揃そろえなきゃいけないものもあるわね」

ユズリアの言葉に俺は深くうなづく。これで完璧に満足したというわけではない。

「そうだな。テーブルと椅子はつくったけど、それにしても殺風景だもんな」

「今度、実家から調度品ちやうどひんを持ってこようかしら」

「貴族御用達きよくたしの生活用具って、スローライフにはつり合わない気がするんだけど……」
完璧に自然と調和したこの空間に、煌きらびやかな装飾はあまり似つかわしくないな。

「それもそうね。じゃあ、今度街まで行って、買い揃そろえましょう」

「街って、ここから一番近いロトウーラの街でも馬車で一週間はかかるぞ？」

「あら、私にかかれば二日で往復できるわよ」

確かにユズリアの『身体強化魔法』と『雷撃』を以てすれば、それくらいの早さで行き来できてもおかしくはない。うらやましいくらいに便利な魔法だ。

「じゃあ、お使いでも頼みますか」

「貴族を使いっ走りにするなんて、顔に似合わず随分と豪胆なのね」

「勘弁してくれ……」

ユズリアは可笑しそうに笑う。つられて俺も笑みが零れていた。

第二章 弾かれ者たち

窓の外から小鳥のような鳴き声が聞こえた。

朝陽に臉の裏がちかちかと瞬く。

窓掛けも買わないとなあ。そんなことを思いながら目が覚める。

伸びをしようと布団を剥ぐと、左腕にずしとした重さと柔らかさを感じた。横に目を向けると、

俺の腕にしがみついて小さな寝息を立てるユズリアの姿。普段の冒険者着ではなく、薄水色の襯衣に丈の短い膝上のショートパンツ。

目のやり場に戸惑った俺は、天を仰いで昨日の晩を思い返した。

「へい、そこのお嬢さん、どうして同じ寝室に入ってくるんだい？」

「？ 寝るからに決まってるでしょ？」

なるほど、ユズリアはこっちの寝室を使いたいわけだ。間取りも内装も二部屋一緒につくったというのに、ユズリアは風水でも気にするタイプなのだろうか。

「そっか、じゃあ、俺は向こうの寝室で寝るわ。おやすみ」

そう言っ、なるべく薄着のユズリアに目を向けないように部屋を出て、隣の寝室に入った。

「……へい、お嬢さん、だからどうしてついてくるんだい？」

「寝ないの？」

ユズリアは不思議そうに首を傾げる。

いや、寝るともさ。そりゃ、今日も疲れたわけだし、さっさと休息を取りたいよ？

「……まさか、同じ部屋で寝るつもりなのか？」

「当たり前じゃない」

枕を両手で抱え、ユズリアはベッドに身を投げ出す。

「なんのために寝室を二部屋用意したと思ってるんだよ」

「なんのためにベッドを大きくつくったのよ」

そんな言い合いの後、結局互いに触れないという妥協案で、俺が折れることになった。ただでさえ贅しわだかまの材料を握られているというのに、既成事実までつくられようものなら、俺は本当に逃げ場をなくしてしまう。

幸い、他の男たちが夢に見るようなことにならずに朝を迎えられ、俺は深い安堵あんどの息を吐く。それにしても、互いに触れないと約束したのに、このお嬢さまは寝相ねざうが悪いらしい。

小鳥のような鳴き声が再び窓の外から聞こえた。同時に窓硝子まどがらすを叩くコツンという音。

「ん？ 鳥……？」

天を仰いだまま、疑問が頭をよぎった。普通の小鳥が魔素の森を抜けられるはずもない。いるとすれば、鳥型魔物だが、明らかに魔物の気配は感じられない。俺はそこまで考えて、ようやく窓の外に目を向けた。

「あれは、魔法鳥？」

透き通る緑黄色の鳥が窓を小さな嘴くちばしで叩いていた。そして、その口元には手紙のようなものが

咥くわえられている。

魔法鳥マジックバードは主に小さな荷物などの郵送に使われる、魔法でつくられた鳥だ。対象の痕跡となるものを触媒しゆばいにすることで、対象がどこにいても荷物を送り届けることができる。

窓を開けると、魔法鳥は俺の手のひらに乗り、小さく鳴く。嘴に咥えられていた手紙を受け取ると、役目を終えたのか、スーッと空気に溶けるように消えていった。

「俺宛てか……」

不思議に思い、手紙を開く。一行目を見て、すぐに差出人を察した。

『愚鈍ぐでんな兄へ

雪舞鳥スノーバードが寒さを告げる今日この頃、いかがお過ごしでしょうか。

先日はお手紙ありがとうございました。

内容はさておき、私は後一か月で帝立魔法専門院ていりつまほうざんもんいんを卒業します。

今、どんな状況なのか近況報告をすぐに送ってください。

私の触媒を付属しておきます』

文面からでは読み取りにくいのが、どうやら妹は俺の行動にご立腹りつぷくの様子だ。兄としての長い経験で培われた感覚がそう告げている。

「へー、ロアって妹さんがいたのね」